

退任記念号の刊行に際して



前所長山田雄三博士の退任を記念して、福祉理論と福祉政策の基本問題をテーマとした論稿を集めて特集号を刊行する。このような企画は社会保障研究所としては初めてのことであり、また他の研究所においてもその例は多くないと思われるので、その意図するところについて、この場所を借りて、多少の説明を加えておきたい。

この企画はもとより、単に山田博士に対して敬慕の念を表明しようという、いわば私的な動機からでたものではない。研究所の研究成果の発表形式として十分客観的な意義をもちうるものと、われわれは考えている。研究所は明らかに研究協団体である。研究協団体の存在理由は、その担当する分野において、期待されるような研究業績をあげることにある。その業績として期待される水準に到達するには、研究員が協団体の一員として研究を重ねることによって、その個別の能力だけからは生み出されないような成果をあげるよう努めなくてはならない。研究所は個々の研究員の単なる集合ではない。研究員を組織づけることにより、研究所は個別の研究者の能力の「加算以上」の成果をあげることが期待される。この期待に応えるには、研究員の人的な組織として重要な要件が要求される。その要件は研究所が研究能力の開発組織として、また研究成果の評価社会として機能することを措いては、満たされない。

この要件の造成にあたって、研究会をとおしての相互批判や研究室における日常の接触が重要な役割を果たすことは明らかであるが、さらに肝要なことはモデルとなる研究者をもつことである。とりわけ研究所の創成期においてこのようなモデルをもつか否かは、爾後の研究所の道程にとって死活の重要さをもつといっても過言ではない。しばしば研究所の成否はその創成期において決せられるといわれるのも、このためであると思われる。このような意味において、社会保障研究所がその初代所長として山田博士をもったことは、はなはだ重要な意味をもつと考える。博士は研究所長として研究所の組織づくりとその運営にあたり研究所の軌道をしかれたばかりでなく、研究者のモデルとして理論的実証的な研究のあり方について研究員の研究指導に全力を傾注された。研究員はこのモデルに照らし合わせて、研究の進め方に工夫をこらし、その成果の自己点検に努めた。そこにおのずから研究所としてのカラーが生まれた。このカラーはやがて研究所の伝統の形成に連なっていくものと思う。

山田博士の退任を記念して、研究所を場として博士と研究をともにした研究者に、福祉社会形成にあたって究明すべき基本問題をとらえて、研究成果の一端を発表していただくことにした。このことは研究所としての自己点検の意味をもち、合わせて社会保障研究として客観的な意義をもちうるものとする。読者のご批判をまつ次第である。

馬場啓之助